

Title	副詞につく「は」について
Author	丹羽, 哲也
Citation	人文研究. 52 卷 3 号, p.311-332.
Issue Date	2001-12
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

副詞につく「は」について

丹羽 哲也

一 はじめに

助詞「は」は文中のいろいろな位置に現れるが、「は」の研究は名詞または名詞＋格助詞につく場合に関心が集まる傾向にあり、それ以外の位置に用いられる「は」については、なお研究が手薄な面がある。本稿は、副詞（用言連用形の修飾法も含む）につく「は」について考察する。その「は」の多くは対比を表すが、その対比のあり方はいかなるものかという問題を主に扱い、さらに、対比とは認められない「は」について、その性格を考える。

ここで、対比関係とはどのようなものか、名詞＋格助詞に「は」がつく場合を例にとって確認しておく。

太郎とは会ったが、次郎とは会わなかった。

という例で言えば、「太郎と」には「会った」、「次郎と」には「会わなかった」が結びつけられるという関係、言い換えれば、「会った・会わなかった」ということに関して、「太郎と」には肯定が、「次郎と」には否定が割り当てられるという関係である。あるいは、

太郎とは先週会い、次郎とはおととい会い、三郎とはきのう会った。

副詞につく「は」について

では、「太郎と」「次郎と」「三郎と」それぞれに「先週会った」「おととい会った」「きのう会った」が結びつけられる。つまり、「XはP」「Yは \sim^P 」と肯定否定に対立するか（肯定否定型）、「YはQ」「ZはR」などと多項間で対立するか（多項型）である。どちらにせよ、Xに対して何が結びつくかというところPが結びつく、Yに対して何が結びつくかというところ \sim^P （Q）が結びつく、という問題と答えの関係が成立する。この関係を丹羽（二〇〇〇）では提示構造と呼んでおいた。

さて、肯定否定型の場合、対比される事項というのは潜在することも多く、その場合、潜在事項は必ずしも明確ではない。

太郎とは会った。

では、潜在する対比事項は「次郎とは会わなかった」でもあり得るが、「他の人とは会わなかった」のようにXが漠然としたものであることも少なくなく、また述語部分についても、「他の人とは会ったかどうかよく分からない」のようにPと直接的に対立しない場合もある。この場合は、「太郎とは会った」から推論される「太郎とは会ったことが分かっている」と「他の人には会ったかどうか分からない」との対立だと考えられる。

対比の分類としては、右に挙げた例のようにXとYと（およびZと）が対立点になる「同型」の対比と、事柄全体が対立する「異型」の対比という分け方も可能である。^(注1)

少しは食べられたが、たくさんは食べられなかった。

のように「副詞+は」の多くは同型の対比を表すが、異型の対比もある。

少しは食べられたが、満腹にはほど遠かった。

後者の対比は、副詞における対比関係だけの問題ではなくなるので、本稿では扱わない。別の機会に考えたい。

二 副詞と対比の「は」

二・一 「は」の適否、対比のあり方

以下、副詞と対比「は」について、二つの問題を扱う。一つは、どういう副詞が対比の「は」を伴うか、また、伴わないかという問題。もう一つは、「は」を伴う場合、何と何が対比されるかという問題である。

一つ目の問題については次のように整理できる。

(ア) その副詞は対比関係を構成して用いられることもでき、その場合は「は」を伴うことができる。

(イ) その副詞の語義に対比関係を含み持っている、つまり、その副詞はいつも対比関係を構成して用いられるため、「は」を自由に伴うことができる。

(ウ) その副詞は対比関係を構成することができず、「は」を伴うことができない。
まず(ア)は、

(足が少しずつ治ってきたことを話していて) ゆっくりと(は) 歩けるようになりました。

という例で言えば、「ゆっくりと」に「は」が加わって「早くは歩けない」などと対比関係を構成することができる。逆に言えば、「早くは歩けない」などと顕在的または潜在的に対比される文脈において「は」が用いられる。

(鯨を見つけて) ほら、くじらがゆっくりと(？)は(泳いでいるよ)。

のように、何とも対比されない文脈では「は」は用いられない(但し、ここで強引に対比関係を持ち込むということはある)。これは当然のことで、名詞や格助詞につく「は」も普通は(ア)である。副詞につく「は」に特徴的なことの一つは、(ア)だけでなく、(イ)や(ウ)が存在することである。(ウ)はその副詞と対比される項目を想定できないものである。

まさか（*は）負けることはないだろう。

「きっと、決して、もし、どうか」などと、陳述副詞の多くは対比項目の存在する余地がなく、（ウ）に属する。（イ）というのは、やや特殊なものだが、例えば「大抵」という副詞がこれに属する。

このゲームは、大抵（は）先手が勝つ。

ここには、「このゲームをやるとわずかな場合は後手が勝つこともあり得るが、大抵の場合は先手が勝つ」という対比関係が成り立っている。「大抵」は、全体の中での大部分の場合を取り上げる働きを持ち、その語義として対比関係を含みこんでいる。したがってこの例では、「は」があってもなくても、実質的な意味の違いはない。せいせい、「は」があった方が対比性が明確になるといふほどのことである。また（イ）には、

今では、すっかり忘れ去られている。

という「今では」のように、対比の「は」を伴った形で副詞として固定しているものもある。

もっとも、このように分けることはできるものの、（ア）に属する副詞も、対比関係を構成することが多いものから稀なものまで、様々である。つまり、完全な（イ）から（ア）を経て完全な（ウ）まで連続的に分布していると考えられる。

二つ目の問題については、次節から大雑把に分けた副詞の種類ごとに見ていくが、対比関係を表しやすい副詞を重視することになるので、通常の副詞分類とは異なる点もある。二・二で量・程度を表す副詞、二・三で情態副詞、二・四で時間に関わる副詞、二・五、二・六では、「結局」「本来」など川端（一九八三）が関係副詞と呼ぶ中のある種のもの、及び並列を表す副詞を扱う。また、一つ目の問題と二つ目の問題は切り離せないので各節で必要に応じて、（イ）や（ウ）にどういふものがあるかということも見ていく。もちろんここではすべての副詞を網羅することはおよそ不可

能なことであり、また、個々の副詞ごとの個別的な事情が関与する場合も少なくないが、それでも、大枠を取り出すことはできる。なお、例文中で「ゆっくりと(は)」のように括弧で括られた「は」は、その「は」があってもなくてもその文が自然であることを示し、「まさか(*は)」「ほとんど(*は)」のようなものは「は」がなければ自然だが、「は」が用いられると不自然になるという場合を示す。「きょうは」のように括弧がないものは、「は」がないと不自然な場合を示す。これは、その文脈において対比関係を明示することが要請されるか、「今では」のように「は」を含む形で副詞になっているか、どちらかである。また、「は」が含まれる文を抽象的に「XはP」と表示し、断りなくXやPという記号を使った場合も、Xが「は」の前接語句、Pが後接語句を表すものとする。

二・二 量・程度における対比

二・二・(1) 「XはP」において対比関係が成り立つには、当然、それに対してYに \sim P(Q)が割り当てられるというYが必要である。副詞の中で、これが成立しやすいものの一つは量や程度を表すものである。

量を表す場合の対比関係の一つ目は、大量の不成立と少量の成立との対比である。

たくさん(?)は) 食べなかった。／少し(は) 食べた。^(多く) (多く、いっぱい、たっぷり／ちょっと、多少)

「大量副詞+は+否定述語」「少量副詞+は+肯定述語」という結びつきは容易だが、次のように「大量副詞+は+肯定述語」「少量副詞+は+否定述語」は成立しにくい。

たくさん(?)は) 食べた。／?少し(?)は) 食べなかった。^(多く)

大量の成立と少量の不成立とが両立することはあり得ないからである。但し大量・少量は相対的なことであるから、次のような例は可能である。

腹がはち切れるほど(は)食べなかったが、普通にたくさん(は)食べた。

「全部」など全量を表す副詞が否定述語とともに用いられる場合も、この対立に含まれる。

全部(は)読まなかった。(みな、すべて、ことごとく、いちいち)

これらの副詞が肯定述語と共起する場合は、対比する余地がないので「は」は用いられない。

全部(?は)読んだ。

次のような数詞に「は」がつく例も、大量と少量の対比の一種である。

百人ぐらい参加するかな?—いや、百人は参加しないだろう。/まあ、百人は参加するだろう。

否定文では「百人より下の人数は参加するかもしれないが、百人は参加しないだろう」と最大限を表し、肯定文では、「百人を越えることはないかもしれないが、百人は参加するだろう」と最小限を表す(尾上一九八一、井島一九九五)。

量ではなく程度を表す副詞の場合にも、高程度の不成立と低程度の成立という対比ができる。

そんなに(は)よくない。/ある程度(は)できた。^(注)(そう、それほど、十分に/まあまあ)

低程度と高程度というのもやはり相対的な関係である。次は「限界以上は無理だ」との対比になっている。

できる限り(は)頑張ってみる。

対比関係の二つ目は、全体の中で、ある部分が成立し、その残りの部分は成立しないという対比である。これは程度副詞では成り立たず、量副詞において成り立つ。

ほとんど(は)食べた。/いくらか(は)いただきました。(大体、大部分、大抵/一部分、いくつか)

これまで量と言ってきたものは、具体的なものの量であったが、それだけでなく、前節の、

このゲームは、大抵(は)、先手が勝つ。(大概、大方、おおよそ)

という例のように、同一の事態が複数成り立つ中でその多くの場合という関係も、一種の量である。これはその事態が多数派に属するか少数派に属するかという対比になる。

三つ目は、二つ目と似るが、部分と部分の間の対比でなく、全体と部分との間の対比である。これは、一般とその例外という関係になる。

一部で(は)不満もあったが、全般的に(は)好評であった。(全体的に、全体では)

二・二・(2) 量や程度を表す副詞で(ウ)に属するものは、以上のような、大量と少量、高程度と低程度の対比関係、全体の中の部分と部分の対比関係、一般と例外の対比関係を結び得ないものである。例えば、次のような高程度を表す副詞は、専ら肯定述語にのみ用いられて、高程度の不成立を表すことがないため、「は」を伴うことができない。

とても(*は)面白い。／相当(*は)強いね。(大変、かなり、大いに、大層、ずいぶん、ばかに)

また次は、肯定述語だけでなく、否定述語にも用いられるが、その場合も、否定的事態における高程度の成立を表すことになるので、やはり「は」は用いられない。

実に(*は)面白い／面白くない。(極めて、甚だ)

最高程度を表す「最も」などや、

最も(*は)面白い／面白くない。(一番、この上なく)

否定述語にのみ用いられて全面否定を表すものも、同様である。

少しも(*は)面白くない。／さっぱり(*は)わからない。(到底、一向に、ちっとも)

あるいは、量や程度が増していくことを表す「もっと」なども、対比関係にはなじまない。

もっと(*は)面白い。(ますます、ひときわ、よけい、一段と)

他方で（イ）に属するもの（あるいは完全な（イ）に近いもの）は、先の「このゲームは、大抵（は）先手が勝つ。」のように部分と部分の対比を表すものに多い。

おおよそ（は）見当がついています。／参加者は、大概（は）すぐ帰る。

全体の中の部分を取り出せば、残りの部分との対比関係を生じやすいだろう。但し、この種の副詞のすべてが（イ）に属するのではない。「ほとんど」は、次のように複数の事態（複数回）を表す場合は「は」が任意に用いられ得るが、

朝食は、ほとんど（は）パンですね。

具体的なものの量（数）を表す場合は、「は」が用いられ得ることも、不自然なこともある。^{（注）}

この本は、ほとんど（は）読みました。

そこへ、村中の子供たちがほとんど（？は）集まってきた。

対比関係というのは、「Xに何が結びつくか」とP、Yに何が結びつくかという

「とP」という提示構造を持つものである。ところがこの二つ目の例は、「村中の子供たちがほとんど集まってきた」全体が一体的に焦点になるのがふさわしく、対比にはなじまない。一方、「大抵」などは基本的には複数事態を表す用法で用いられる副詞であり、それ故「は」も任意なのである。^{（注）}

二・三 情態副詞における対比

情態副詞（結果副詞も含む）において成立する対比関係は、大きく二つに分けられる。一つは様態や結果という質的な修飾の中に含まれる程度を対比させるものである。

何かぼそぼそと(は)言っていたが、はっきりと(は)言わなかった

こなごなに(は)割れないが、大きく(は)割ることができる。

「ぼそぼそと」と「はっきり」という二つの様態、「こなごなに」と「大きく」という二つの結果の間に、「不明確に」
明確に「小さく—大きく」というような程度差に還元できる関係が含まれている。程度差の対比であるから、二・
二で見たように、低程度の成立と高程度の不成立という関係になる。

ボールをさっと(は)〔打ち返すことができる／打ち返すことができない〕。

という動きの敏捷さを表す「さっと」も、肯定述語より否定述語の方が用いられやすい。後者は「ゆっくりとは打ち返すことができる」のような低速度の成立との対比関係を想定しやすいのである。とは言え、情態副詞で「は」が伴うことはそれほど多くはない。その副詞と他の副詞との関係を程度差に還元できないことが少なくないからである。「すかさず」という副詞は、

ボールをすかさず(*は)〔打ち返すことができる／打ち返すことができない〕。

のように肯定述語だけでなく、否定述語でも「は」は用いられない。「すかさず」は「さっと」と同様に動作の敏捷さを表すが、「機会を逃さずに、抜け目なく」という含みを持っていて意味が複雑な分、一次元の程度に還元し難いのであろう。

情態副詞における対比関係には、もう一つの種類がある。

早く(は)書いたが、きれいに(は)書かなかった。

縦に(は)切れるが、横に(は)切れない。

述語「書く」「切れる」の様態や結果の候補「早く、きれいに」「縦に、横に」の中で、一方は成り立ち、一方は成り

立たないという対比であり、ここには上のような程度関係はない。これは、「鉛筆では書くが、ペンでは書かない」のような格項目の対比の場合と同じ関係にある。但し、情態修飾で、複数の修飾候補が想定される中で、一方のみが成り立つという関係が成り立つ状況はそう多くはない。

ドンとは叩いたけど、コンとは叩いてない。

という例が成り立つのは、「コンと叩いただろう」と相手に言われて、そうではなく別の叩き方をしたと主張するというような、かなり特殊な状況である。

二・四 時間における対比

二・四・(1) 時間関係が持つ対比関係というのは、量・程度の副詞と同じように、大きく三つに分けられる。一つ目は、時間の量の対比である。

しばらく(は)かかりますが、長く(は)かかりません。(ちょっと、少し／永遠に、年中、四六時中)

のように、基準時以降に短時間はPが成立するが長時間は成立しないという対比関係をなしている。これは二・二の量を表す副詞の少量の成立と大量の不成立との対比に相当する(「ちょっと」「少し」のように語彙的にも重なっている)。次のように成立までの所要時間を表す副詞も同様である。

すぐに(は)来られないけれど、そのうちに(は)来ます。

頻度を表す副詞では、低頻度の成立と高頻度の不成立という関係になる。

たまに(は)外食することもあります。／そう毎日(は)来られない。(稀に、時々／しょっちゅう)

時間的な対比関係の二つ目は、時間の前後関係における対比である。Xで指示されたある時点(時間帯)と、X以

降または以前のある時点(時間帯)との対比を表す。

きのう(は)来たけど、あしたは来ない。／以前は行かなかったけど、最近|は行く。

後は彼に任せよう。／今(は)ちょっと困ります。(昔、一昨年、さっき、あした、そのうち、将来、今ごろ)

Xがある時点(時間帯)を指示せずに、時間幅を表す副詞である場合も、現在または基準時からのその時間幅と、それ以降との対比になる。

しばらく(は)待ちましょう。／十年間(は)ここにいました。(一時、一時的に、やがて)

同じ「しばらく」でも、先の例「しばらくはかかるが、長くはかからない」は時間量の大小の対比であったが、これは「これからしばらくは待つが、その後は待てないかもしれない」という前後間の対比である。次のような、事態間の順序関係を表す場合(森重一九五八、川端一九六四で内容時と呼ばれる)も、ここに含まれる。

最初(は)時間を守ったが、二度目三度目はルーズになった。

この二つ目の対比関係は、多項間の対比が可能である。

おとといは|滋賀、きのうは|京都、きょうは|奈良に行きました。

三つ目の対比関係は、前節の三つ目に相当するもので、一般と例外の間の対比である。

普通(は)ここに係りの人がいるんです。(いつも、通常、普段、平静)

この例は普通一般の場合と今現在の場合との対比になっている。

量・程度副詞と時間副詞の対比関係は、時間も一種の量である故に、かなり対応している。上に見たように、一つ目どうし、少量と大量・低程度と高程度、低頻度と高頻度の対比に対応し、三つ目どうし、一般と例外の対比も共通していた。また二つ目どうしで、量副詞の部分量間の対比は、時間副詞の前後の対比に、部

分と部分との対立である点で対応すると考えられる。多項間の対比が可能な点も共通している。もっとも、前者では全体量をXとYで分割するのに対し、後者では全体量は無限であり、その中の関係する部分と部分における対比であるという点や、「きのうは来たが、あしたは行かない。」のように、時点性が強い場合は、名詞の項目間の対比に近いという点など、相違もある。

二・四・(2) 時間に関する副詞で、これらの対比関係が成り立たないものは、(ウ)に属する。次のようなアスペクトに関わる副詞にそれが多い。

もう(*は)できた。／まだ(*は)大丈夫。(とっくに、ついに、かねて、あらかじめ、なお、もはや)

あるいは、ある時点を表す副詞の中にも、個別的な事情で(ウ)に属するものがある。例えば「いつか」は、過去のある時を表す用法と未来のある時を表す用法とがあるが、未来を指す用法では、対比的に用いられることもそうでないこともある(ア)。

いつか(は)わかるときが来るだろう。／いつか(*は)近いうちに、お会いしましょう。

ところが、過去を指す用法では対比的に用いられることがない(ウ)。

いつか(*は)、彼とその話をしたことがある。(いつしか／いつのまにか)

未来の場合なら、これからのどの時点でそれが実現するか複数の可能性があり、それ故対比関係が生じ得るが、過去の場合、過去のある時点である出来事があったというだけでは、対比関係は生じ得ないのである。

一方、(イ)に属するものには、次のようなものがある。

とりあえず(は)ビールをもらいましょう。／当分(は)お別れですね。(ひとまず、一応、まずは)

これらは現在または基準時からの短時間とそれ以降の時間との対比関係が成立している。また、

さんざん愚痴をこぼした後、しまいに(は)怒りだした。

ほしいものはいろいろあったが、結局(は)何も買わなかった。(挙げ句の果てに、はては)

のように、それ以前と最後の段階との対比を表すものもある。これらのものは、どちらも内容時を表して、出来事の流れの中のある部分を取り出すことにおいて、それ以外の部分との対比関係が生じている。もっとも、このような関係を表す副詞のすべてが(イ)に属するわけでない。例えば「しばらく」は、短時間を表す点で「当分」など意味的に近いが、対比的に用いられる場合もそうでない場合もある(ア)。

休戦協定が成立し、しばらく(は)平和が続いた。

彼は、十年ほど前、しばらく(？は)茶道教室に通ったことがある。

「しばらく」が単に短時間を表すのに対し、「当分」などは、出来事の流れの中で後の時間と対比しつつ当の短時間を表すため、「は」が任意なのである。

また、現在を表す副詞の中で、その語義に未来や過去との対比関係を含みこんでいて、(イ)に属するものがある。「今のところ」「今のうちは」は、「後にはどうかかわからないが」というような未来との対比を表す。(注)

今のところ(は)、結婚の予定はない。／今のうちは大丈夫です。

これに対して、「このところ」「今では」は、過去の状況との対比である。

ずっと頑張ってきたが、このところ(は)バテ気味なんだ。／以前は大変だったが、今では簡単にできる。

二・五 談話展開における対比

二・五・(1) 談話の展開の流れの中で対比関係というべきものがある。

副詞につく「は」について

三高とか言うけど、結局（は）相性よ。

いろいろ議論されるが、つまるところ（は）、本人が悪いんだ。（つまり、とどのつまり、所詮、要は）

「結婚相手に関して、三高とかいろいろ条件が問題にされるが、結局（最終的に）問題になるのは相性だ」「いろいろ議論されて、結論はいろいろな方向に出る可能性があるが、つまるところは（最終的な結論は）本人が悪いということだ」というように、「談話内において、それまでの段階では～^Pだが、最終段階ではPに帰着する」というような対比関係を表す。同じ「結局」でも、前節の「結局は何も買わなかった」という例においては現実に起きた出来事の流れにおける対比であったが、右の例は議論の上での時間の流れが問題になっている。

続きまして（は）、ニュースをお送りいたします。

においても、談話上のそれ以前とそれ以降との対比である。また、

中国、インド、さらに（は）アラブの方まで足を延ばすつもりだ。

という「さらに」の類似項目を追加する用法では、「これまで挙げたのは中国、インドだが、それに留まらず、さらに挙げるのはアラブだ」という対比関係がなりたつ。^(注8)次の「ひいては」「さては」も同様である。

個人の利益が、ひいては、社会の利益につながる。

家族をはじめ、病院の主だった医師、職員、看護婦や看護人やさては患者に至るまでが……

（北杜夫「楡家の人々」新潮文庫）

時間性を持たないで、談話上の項目間の対比を表す副詞もある。

この論文はかなり問題がある。一つには論理が曖昧である。また一つには結論がはっきりしない。

一方で（は）結婚の約束をしながら、他方で（は）別の女たちとつきあっていた。^(注9)

選択関係を表す「または」「あるいは」「もしくは」「ないし」も、「(ある場合は、) またの場合には」というような対比関係である。

パンまたはライスが付きまます。／引越したか、あるいは、番号が変わったかだ。
「かつ」も「は」が付き得るが、これは選択でなく両立を表す。

高慢で、かつ(は)生意気であった。／かつ(は)歌い、かつ(は)踊った。

「ある場合に、またある場合に」という関係が、同一人物が合わせ持つ二つの状態や動作であるなら、両立関係として成立する。

二・五・(2) 以上のものは、対比関係を内在する(イ)に属するものであった。これらに対して、単なる並列を表す「そして」「それに」「その上」などの接続詞(接続副詞)は、前項に後項を付加するだけで、対比関係を持たないため、「は」がつかない(ウ)。

月は明るく、そして(*は)、花は美しかった。／スープにハンバーグ、それに(*は)、ライスもお願いします。
あの店は、高くてまずいし、その上(*は)、雰囲気もよくない。

二・六 世界間の対比

副詞における対比関係には、Pが存在する世界の間での対比とでもいうべきものも存在する。

法というものは、そもそも(は)、国民のために存在するものだ。

人間とは、本来(は)孤独なものである。(もともと、元来、本当のところ、本当は、実は)

これらは、「法は現状では国民の利益に反するところがあるが、そもそも(は)国民のために存在するものだ」「人間

は(日常の生活では)家族など他の人間との関係を持っているが、本来(は)孤独なものだ」というような、現象的なあり方と本質的なあり方の対比関係である。次は「評判」の世界(人の言説の世界)と「実際」の世界との対比である。^(注⑩)

前評判では大したことなかったが、実際はすばらしかった。

話し手の複数の発話・思考が対比されることもある。次は「医学的に言えば／考えれば」などと等価である。

医学的に(は)十分可能です。しかし、倫理的に(は)問題かもしれません。

正直なところ(は)、よくわからないんだ。

二・七 対比のまとめ

「副詞十は」が何と何の対比を表すかという問題について、これまでとは少し別の角度からまとめ直しておく。二・二から二・六までの副詞は、大雑把に言って、前半は述語のありようを限定するものに傾き、後半は事態の位置づけを表すものに傾く。二・二の量・程度を表す副詞の「たくさん(は)食べなかった」「ほとんど(は)食べた」、二・三の情態副詞の「こなごなに(は)割れない」、二・四の時間副詞の「すぐに(は)来られない」などは、述語のありようを量・程度的に限定するものであり、また、二・三情態副詞の「縦に(は)切れる」などは述語のありようを質的に限定するものである。それ故、「は」による対比関係も、その限定の仕方における対比である。一方、二・二の中の「このゲームは大抵(は)先手が勝つ」「全般的に(は)好評であった」のような副詞は、その事態が多数派に属するの少少数派に属するの、一般に属するの、例外に属するの、か、という点で事態の位置づけを表し、二・四の中で「以前(は)行かなかった」「普通(は)ここに係りの人がいる」などの副詞は、事態が生起・存在する時間

的な位置関係を表し、二・五の「結局(は)相性だよ」などの副詞は談話の展開の流れにおける事態(発話内容)の位置関係を表すものであり、さらに二・六の「正直なところ(は)よくわからない」などの副詞も、現実の世界・発話思考の世界などの点から、事態(発話内容)を位置づけるものである。それ故、「は」による対比関係も、その位置づけの仕方の間での対比になる。以上のように大きく二つに分けられるのは、副詞というものの多くがこのどちらかにある以上、当然のことである。もちろん、このどちらにもあてはまらないものもあって、二・一で述べたように、陳述副詞の多くは、対比関係を構成しない(ウ)であった。

三 対比でも主題でもない「は」

副詞(あるいは接続詞)につく「は」には、対比を表すとは考えにくく、かつ主題を表すわけではないというものがある。その一つは、「あるいは」「大方」「まず」のように、推量表現とともに用いられてその蓋然性の高低を表す副詞につく(含まれる)ものである。

あるいは、もう来ないのかもしれない。／大方(は)どこかで遊んでいるんだろう。

まず(は)大丈夫だろう。

「あるいは」は、選択を表す「あるいはPか、あるいはQか」という用法から、「PかQかどちらかが成り立つのなら、Pがある確率で成り立つ可能性がある」という関係において、可能性を表す用法へと展開したものだと考えられる。つまり、この「は」はもともと是对比用法であったが、その対比性を失ったものと言うことができる。「大方」「まず」もそれぞれに派生関係をたどりうるであろう。また、次のような語法出自の副詞「おそらく(は)」「は推量を、」「願わくは」は願望を表す場合に用いられるが、もともとその「は」は主題を表していたと考えられる。

おそらく(は)それが正しいのだろう。／願わくは、無事合格しますように。

さらに、接続関係に関わるものがある。「さては」はその文脈や状況からPと推量するか、不確定ながらPであることに気がつくという場合に用いられる。

さては敵の回し者だな。／さては逃げたか。

「(それ)では」はその場面文脈をきっかけとして、Pと意志、勧誘、命令するという場合に用いられる用法と、Pと疑問を抱く場合に用いられる用法とがある。

では、参りましょう。／では、私にやらせてください。

では、犯人は一体誰なのか？

「ついては」はその文脈をもとにして、Pと要望するとき用いられる。

ついては、みなさんのご意見を伺いたい。

これらは、主題から派生したとも対比から派生したとも、ただちには言えない。^(注1)

以上のようなものは、その出自が何であれ、対比でも主題でもない「は」として認めなければならない。しかしそれはいつても、この「は」が形骸化してしまっているわけではない。これらには共通する点があって、それは、述語が単なる事実を表す述語ではなく、推量・疑問・希望・勧誘・命令などを表す述語であることである。

八時に駅に着くって。——それでは、私が迎えに行きましょう。

八時に駅に着くと電話がありました。それで(*は)、私が迎えに行きました。

「それで」で比較すると、意志を表す前者は「は」が用いられ、事実を表す後者の例は「は」が用いられない。「それで」によってこの状況で何かをすることを導くことは両者に共通するとして、発話時点で何をするかまだ定まって

いない前者では、どのような行為をするか、様々な可能性の中から選び取ることになる。これは、Xを提示して、それに何が結びつくかという問題意識のもとに、Pが結びつけられるという提示構造を持っているということである。一方、Pが事実として定まっている後者の例では、「それで」に対して何が結びつけられるかが既に決まっているということであり、「は」によって提示構造を取ることはできない。「は」の主題提示用法は、主題解説関係を表すことにおいて提示構造を持ち、対比用法は、一章で見たように、対比関係を表すことにおいて提示構造を持っている。それに対して右の「は」は、主題や対比という具体的な意味を持ってはいない。しかしながら、その副詞の意味に依存してではあれ（限定された述語でのみ成り立つことではあれ）、提示構造を持つという点では同じなのである。

これらの他に、発話・思考を表す副詞（句）に「は」が用いられるというものもある。

私が思うに（は）、もうやめといった方がいいのではないだろうか。

子供たちの言うことに（は）、泥棒は山の中に逃げていったそうだ。

これらは、発話・思考の行為のみをXとして提示し、それによってそこに欠ける内容が具体的にどのようなものであるかという関心を喚起して、それをPで具体的に述べるといふ提示構造が成り立っている。また、発話・思考の行為でなく、

不思議なことに（は）、お金が一向に貯まらない。／幸いなことに（は）、けが人はなかった。

さすが（は）プロだねえ。

のように評価と評価対象の関係にある場合もある。ここでも、それは何のことを問題にしての評価かという関心のもとに、その評価のみを先ず提示して、Pで具体的に評価対象を示すという提示構造が成り立っている。

以上、XとPの関係のあり方は種々あるにせよ、構造は共通するのであった。

〈注〉

- (1) 「同型」「異型」という用語法は、益岡(一九九一、第七章)に基づく。
- (2) 大量副詞＋否定述語の場合、「たくさんは食べなかった。」に比べて、「は」のない「たくさん食べなかった。」は据わりがよくない。「は」で対比されれば「少量食べた」ことがわかるが、対比せずに「たくさん食べなかった」だけでは、どれだけ食べたか不明のままであり、「たくさん」を導入する理由がはっきりしないのかもしれない。「そんなにたくさん食べなかった。」のようにあらかじめ大量が想定される文脈であれば自然である。
- (3) 少量副詞＋否定述語は、「少し食べなかった」のように「は」がなくても不自然である。「たくさん食べなかった」の不自然さと同様の理由であろう。なお、少量すらない、つまり全量否定を表すには「少しも食べなかった」という形がある。
- (4) 高程度副詞＋否定述語でも、「あまり」は、「あまり(*は)よくない」のように「は」を伴うことがない。「とりわけ」も同様である。この理由はよくわからない。
- (5) 「ほとんど」には、右の用法の他に、ある状態の近似値を指す用法があるが、
勤務は、ほとんど(*は)毎日です。
これは、専ら近似値であることを示すことに関心があって、残りの小部分がどうであるかという関心はないので、やはり対比を表すことはできない。
- (6) 具体的なものの量(数)か事態の複数かということは、単純に二分できるものではない。次の二つ目の例は、複数の「本」でもあると同時に、一冊の本を読むという行為が積み重なって成立することであるから、事態の複数とも捉えられる。それゆえ、「大抵、大概、おおよそ」も、一つ目の例に比べてより自然である。

この本は、(ほとんど／大体／？大抵／？大概／？おおよそ) 読んだ。

この種の本は、(ほとんど／大体／大抵／大概／おおよそ) 読んだ。

(7) 「今のうち」に対して「今のうちに」という形の副詞は、後に備えて今(する)という意味で用いられるため、対比関係は生じず、「は」を伴うことができない。

今のうちに(*は) 別れた方がいい。

(8) 「さらに」でも、同一の動作を繰り返したり、状態が高まることを表すときは、「は」が入ることはできない。

さらに(*は) 説明を加わえた。／さらに(*は) 美しくなった。

(9) 「一方で」「他方で」に対して「一方」「他方」には「は」がつかない。これは、並列関係というより話題転換を表すものであるからかもしれない。

一方(*は)、田中は旅行に出かけるところだった。

(10) 「実際」は対比関係でない場合にも使われる。次は「前評判」と「実際」が同類関係にあり、「は」は用いられない。

前評判がすごかったし、実際(*は)、すばらしかった。

(11) 換言を表す「ということは」、理由を表す「というのは」という副詞がある。

あしたは十月二日。ということは、原稿の締め切り日だということだ。

私は高をくくっていた。というのは、私みたいな人間が周りにもいっばいいいたからである。

これは、副詞であるとはいえ、前文を主題に立てる働きをしており、主題用法の「は」と言ってもよい。

△文献▽

- 青木侂子（一九九二）『現代語助詞「は」の構文論的研究』（笠間書院）
- 井島正博（一九九五）「数量詞とハ・モ」『築島裕博士古稀記念国語学論集』（汲古書院）
- 尾上圭介（一九八一）「は」の係助詞性と表現的機能」『国語と国文学』五八巻五号（東京大学）
- 川端善明（一九六四）「時の副詞（上）（下）」『国語国文』三三巻一一・一二号（京都大学）
- （一九六七）「数量の副詞」『国語国文』三六巻一〇号
- （一九八三）「副詞の条件」渡辺実編『副用語の研究』（明治書院）
- 工藤浩（一九八三）「程度副詞について」『副用語の研究』
- 丹羽哲也（二〇〇〇）「主題の構造と諸形式」『日本語学』一九巻五号（明治書院）
- 野田尚史（一九九六）「は」と「が」（新日本語文法選書Ⅰ、くろしお出版）
- 原田登美（一九八二）「否定との関係による副詞の四分類—情態副詞・程度副詞の種々相—」『国語学』一二八集
- 益岡隆志（一九九二）『モダリティの文法』（くろしお出版）
- 森重 敏（一九五八）「程度量副詞の設定」『国語国文』二七巻一号